

4. ポリクリニックの医事運営

Medical Management of Polyclinic in the TOKYO Olympic and Paralympic Games

柳下和慶*

●はじめに

東京オリンピック・パラリンピック競技大会（東京 2020 大会）はコロナ感染症の中での異例の開催となった。市中感染とその対応が厳しい中、選手村総合診療所（ポリクリニック）は多くの医療スタッフとご関係者の熱意と力の結集で運営され、大きな事故なく終了することができた。本稿では、ポリクリニックの医事運営体制の概要について報告する。

●ポリクリニックの診療体制

東京 2020 大会の医療サービス体制は、ポリクリニックのほか、競技会場、練習会場、メディア関連の国際放送センター（IBC）メディアプレスセンター（MPC）に医務室を設置し、入院を要する重症患者や特殊検査を要する場合は、大会指定病院へ搬送する体制とした。

ポリクリニックの診療体制計画は、過去大会を参考とし IOC/IPC の要望に沿う形で構築された。過去大会の Primary care, Podiatry, Specialist clinic は、内科、整形外科、皮膚科、女性アスリート科などの専門科で分担し、人数や規模は過去大会を参考として計画された。

ポリクリニックの対象者はアスリートおよびコーチ監督などの Team Official (TO) で、診療科としては、内科、整形外科、救急科、眼科、歯科、精神科・メンタルヘルス、皮膚科、女性アスリート外来であり、パラ期間中は尿路感染や脊損患者

の尿閉対策等のため泌尿器科を設置した。またコロナ対策として発熱外来を新設した。診療部門としては、理学療法部門、放射線部門、薬剤部門、臨床検査部門を設置し、外来機能のみとした。

診療体制は、マネージンググループによる集団指導体制とした。オリンピックでは、高澤祐治先生を中心に、片寄正樹先生、大内洋先生、田畑尚吾先生、近藤尚知先生、赤木龍一郎先生、藤原清香先生、塚原由佳先生と各科チーフと、発熱外来を渡部厚一先生、田畑先生によりマネージンググループを担当し運営にあたった（図 1）。パラリンピックでは、障がい者スポーツに精通した岐阜大学青木隆明先生、和田野安良先生にご参画頂きポリクリニックを運営した（図 2）。

診療時間は救急科と発熱外来は 24 時間とし、その他の主たる診療部科は 7 時から 23 時とし、2 シフト制とした。合計約 260 名の医師・歯科医師が担当し、コメディカルは歯科衛生士、歯科技工士、視能訓練士、放射線技師、理学療法士等、看護師、臨床検査技師、薬剤師の合計約 540 名が担当した。

●ポリクリニックでのコロナ感染対策

東京 2020 大会はコロナ下での開催であり、各種感染対策を講じることとなった。市中の感染拡大を背景に、医療従事者のリクルートでは多くの困難があり、発熱外来や鼻咽頭 PCR 検査のための人員増も負荷となった。組織委員会では、感染症に関する情報の一元化と関連部署のハブとして、感染症対策センター（Infection Disease Control Center : IDCC）を設置し、管理運営にあたった。IOC/

* 東京医科歯科大学スポーツ医歯学診療センター病院教授

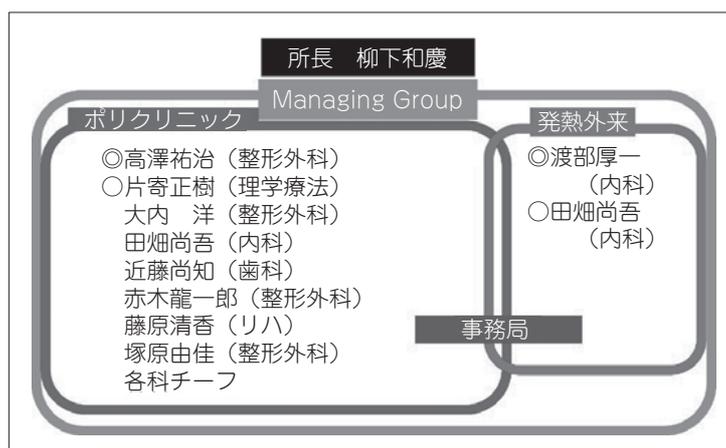


図1 オリンピック期間中のマネージング体制 (敬称略)

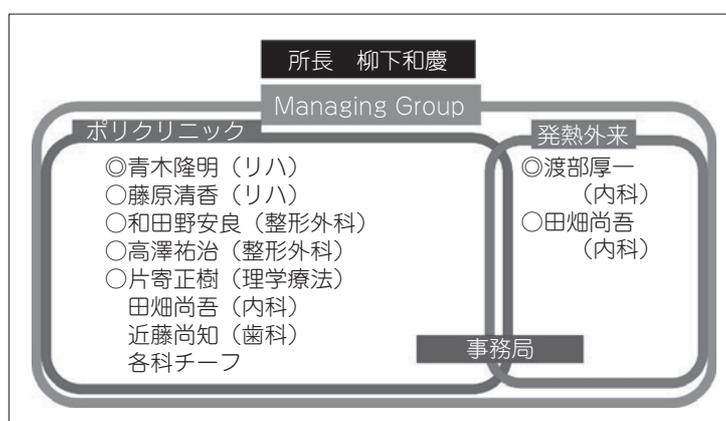


図2 パラリンピック期間中のマネージング体制 (敬称略)

IPCは感染対策の規則集としてplaybookを発行し、マスク着用、手指衛生、距離の確保、部屋の換気など標準感染対策の徹底を図った¹⁾。大会中のPCR検査を徹底して実施し、特に選手とTOおよびポリクリニックの関係者などは、毎日PCR検査を実施した。結果、関係者へのスクリーニング検査はオリパラ通じて100万件を越す一方、陽性確定者は299名(0.03%)であり、比較的低い陽性率となった²⁾。発熱外来では、有症状患者の診察、スクリーニング検査陽性者に対するPCR検査による確定診断、陽性確定時にIDCCや保健当局への報告と連携などを担当した。

ポリクリニックでは屋内の密を避けるため、過去大会にないweb予約システムを導入した。ポリクリニック入口ではトリアージを行い、予約確認と体温チェックおよび質問票による体調チェックを行い、異常があれば発熱外来へ誘導した。大会中のポリクリニックの受診者数は、オリンピック

約8,530人、パラリンピック約5,240人となり、過去大会と比較して若干受診人数を制限することができた²⁾。言語対応は英語が基本だが、多言語可能な言語堪能なスタッフを登用し、通訳ツールも多く使用した。

結果として選手村での陽性確定者数は17名にとどまり、一定の感染制御を達成した²⁾。

●各診療部科での特徴点

整形外科は、一般的診療のほか装具の処方と理学療法の処方を担当した。理学療法部門には2名の整形外科医を常駐させ、連携を密にした。ポータブルタイプのエコーを診療室ごとに設置し、運動器外傷・障害に対するルーチン検査として実施した。内科では、消化器系、耳鼻科系、循環器系、神経系の順で多く、処方希望やメディカルチェック、採血希望にも対応した。歯科では、緊急治療はアスリートやTOも対象だが、マウスガードは

アスリートのみ対象とした。エアロゾル発生もあるため、感染症対策として口腔外バキュームを整備した。眼科ではコンタクトレンズ・メガネの処方はアスリートのみ限定し、IOC/IPCや次回のパリ大会関係者からもコンパクトな大会に向けた取り組みとしても評価された。救急科では、アナフィラキシーショックや頭部外傷、心停止患者など、多様な疾患、外傷を担当した。救急医師はトリアージ業務も担当した。陽性者隔離施設のメンタルケアのため、精神科ではwebによる遠隔でのコンサルテーションを実施した。人数は少ないものの必要な診療科であった。女性アスリート科では、PMSのほか、不正出血、妊娠関連の診察があり、また女性医師を希望する関係者もいたため、有効な診療科だった。放射線部門では、1.5TのMRIを2台とX線装置を設置した。報告書は英語で作成され、非常に好評だった。運動器疾患・外傷が多いため、理学療法部門はポリクリニックの中心的な部門であり、1日最大236名、受診患者の約3割がポリクリニックを受診した。パラ期間中は

市中病院での救急対応は逼迫しアスリートや関係者の搬送調整で困難が生じたが、組織委員会に調整本部を設置して対応した。

●おわりに

多くの困難があったが、大会中大きな事故なく、ポリクリニック診療を終了することができた。IOC/IPCからは高い評価を得て、NOC Focus Group Reportからは、“The polyclinic was considered as the best ever at any Olympic Games”との高い評価を得ることができた。ご尽力いただいた関係者の皆様に、深謝申し上げます。

文 献

- 1) THE PLAYBOOK. ATHLETES AND OFFICIALS. Your guide to a safe and successful Games. June 2021 Version 3. IOC and IPC.
- 2) 東京2020大会の振り返りについて. TOKYO2020組織委員会HP.